

# 『あなたの心に花がさく』

ちゅん助

2,982文字

あらすじ

金曜日は、週で一番家の中が汚れている。母子家庭の女が疲れきって家へ帰ると、小学生の娘たちが食器を洗い、洗濯物をたたんでくれていた。翌日の土曜日は、家族で掃除の日にし、布団を干したりする。綺麗になった部屋にお手伝いのご褒美で買ったチューリップを飾る。人が美しいと感じる時とは……。

午後七時、ロングの髪を後ろに一つで束ねた三十代前半の女が黒のスーツを着て電車の席に座っている。女は、電車の窓からすっかり日の落ちた景色を眺めているが、頭の中では今日しでかした仕事のミスを思い出している。上司にはこっぴどく叱られ、定時を少し過ぎた頃、やり直しを仰せつかった書類がようやく終わった。

電車が女の最寄りの駅に着くと、女は左の手首にはめた腕時計の時刻を確かめた。七時十五分前。とっさに冷蔵庫の中身を思い描く。牛乳と卵、鶏肉が少し、あと野菜くずのような残り野菜たち。料理をするにも出来合いを買うにもスーパーに寄らなければ、何もなさそうだ。金曜日は一週間の内でおざなりにしていた家事が積もりに積もり、收拾がつかない状態になっている。居間のソファの上には洗濯物が乾いたまま山となり、台所のシンクには昨晚と今朝の食器が洗わずにそのまま積み重なっている。帰ってもすぐに調理ができる状態ではない。

女は小学二年生と三年生の娘がいる母子家庭だ。料理に手間取ると、お腹を空かせた小さな

子には、母として可哀そうな気がする。かといって、普段の料理だって、大して手の込んだものは作っていないのだが……。

女は、明日は休日なので、二人の好きなオムライスを作ると決め、その代わりに今晩はレトルトカレーで許してもらおう、と思った。レトルトカレーなら、家に帰ってからご飯を炊くだけですむ。

女はスーパーで手ごろなレトルトカレーの甘口の箱を三箱手に取ると、買い物カゴに入れ、急いで会計を済ませた。

団地のやたらと重い扉を押し開け、女は「ただいま」と言いながら靴を脱ぎすてる。女の声聞きつけて、娘たちが駆け寄ってきた。

「お母さん。お帰りなさい」

女は、娘たちの頭を撫でながら「遅くなって、ごめんね。すぐご飯にしよう」と言った。女は台所へ行き、食卓にスーパーの袋を置く。ふと、流しに目をやると、溜まっていたはずの食器が全て洗って水切りに置いてある。事態を呑み

込めずにいる女の腰を上の子が人差し指でチョイチョイと突っついた。上の娘の真美は、どこか自慢げに「私が洗っておいたよ」

と言った。女は信じられない面持ちで真美と水切りの食器を交互に見比べる。確かに子どもが洗ったであろう、と思われる汚れが所々に付着し洗いきれていない皿がいくつもあった。

真美は、女の驚く顔が面白くて仕方がなさそうだ。

「だって、お母さん、大変そうだから」

「ありがとう、真美ちゃん」

女は真美を抱きしめる。幼い幼いと思っていたが、頼んでもいないお手伝いをし、親を気遣ってくれるとは。その気持ちが嬉しかった。

「いいなあ。結も、結も」

と、言って下の娘の結が抱っこをせがむ。

「結も洗濯物をたたんだからね」

「えっ？本当に？」

女は居間のソファの上の洗濯物がなくなっていることに気付いた。その代わり、たたまれた衣類がソフ

アールの前のテーブルの上に置かれていた。大きさもたたみ方もまちまちで不格好ではあったが、一生懸命たたんでいる姿が目についた。きっと、これだけたたむのに、たくさん時間がかかっただろう。

「結ちゃん、ありがとう」

そう女は言うのと、ギュッと二人を抱きしめた。二人はくすぐったそうにしていた。

「二人とも、そんなふうだと早くお嫁さんになって、どこか行っちゃうかな？」

と、言うのと娘たちは「行かないよう。お母さんといるもん」と言った。嬉しくて、嬉しくて、心がポカポカと温かくなった。

女は食器洗いの手間が省けたので、夕飯は娘たちの好物を作ろうと思った。

「よし、お母さん、今晚はオムライスを作ろうかな」

と言うのと、娘たちは喜びの声を上げた。

冷蔵庫の中を覗くと、何とか三人分作れそうだった。

三人で食卓を囲んでいると、女は仕事の嫌なことも、一日の疲れもどこかへ消えてしまった。女は明日の予定を考える。土曜日で休み、天気もいいだろう。

仕事の疲れがたまっていて、昼近くまでゆっくりしたいところだけれど……。

「明日は、お掃除の日にしようか？」

と、娘たちに提案した。休みの日なのに家のお手伝いかと半ば嫌がるかもしれない、と思いつつ、言ってみると快く賛成してくれた。子どもながらに家の中が汚いと感じているのだとしたら、親として大変申し訳ない気持ちになる。

翌朝は、掃除をするには打って付けの晴天になった。女は家族全員の布団をベランダに干す。それからカーテンを洗濯機に入れ回す。その間、娘たちは「窓ふきをする」、と言って大きく息を吸っては窓に吹きかけ、曇ったガラスを古いハンカチで覗き込むように拭いていた。

昼前にはすっかり掃除も終わり、昼食は外で食べたいと娘が言うので、三人で近くのファーストフード店へ入った。

左手は真美と、右手は結と仲良く手をつないで団地へ帰る途中、女は花屋の前で足を止めた。

「どうしたの？」

「お花、買っていこうか？」

女は目を輝かせ、花屋の奥に入っていく。経済的に余裕があるわけではないので、花などここ何年も買ったことがない。真美も結も、色とりどりの花に目を躍らす。

「今日のお手伝いのご褒美に、好きなお花、買ってあげる」

そう女が言うと、娘たちは真剣に花を物色しだした。結局、切り花のチューリップを買うことにした。真美がピンク色、結が黄色、女は赤色のチューリップをそれぞれ一本ずつ買った。

団地に着くと、流しの下での収納扉から花瓶を取り出し、買って来たばかりの花を活けた。そして、家族がよく見える居間のテーブルの上に飾った。窓には洗ったばかりのカーテンが気持ちよさそうにそよそよと春風を運んでいる。

三人は、うっとりとして三色のチューリップを眺めている。片付いた部屋にある花とは、こんなにも美しく、人に安らぎを与えるものなのか、と感じた。「きれい」と、娘たちが口をそろえて言った。女もその通りだと思った。

娘たちが嬉しそうなら、女にとってそれ以上の喜びはない。女の心の中にひとつ花が咲いたようだった。

三人で干したての布団を取り込む。居間にそのまま布団を広げ、女は娘たちとゴロリと寝転ぶ。太陽の匂いがするフカフカの布団は、気持ちよい。

「お日様の匂い。お日様の元気をもらいたい」

と、娘たちは布団に顔をうずめる。そんな娘たちの姿に女は「貴方たちの笑顔がお母さんの元気のもとですよ」と、心の中でつぶやいた。